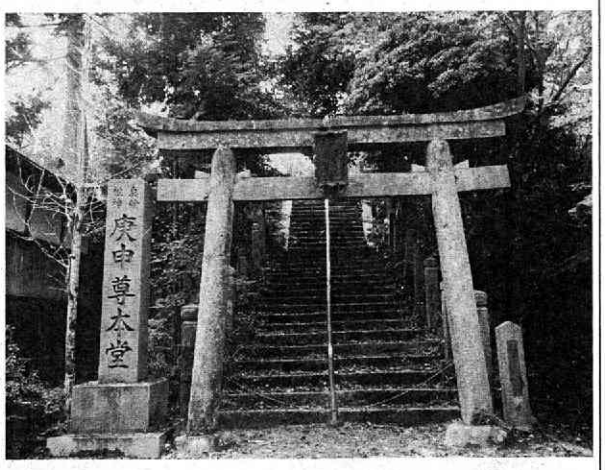
伸銅業界つなぐ「庚申（こうしん）さん」信仰

2016年 庚申山広徳寺 本尊御開帳行事、本堂再建へ

申年である2016年は、真鍮（黄銅）の神様「庚申さん」として知られる庚申山広徳寺（滋賀県甲賀市水口町山上）の12年に一度の本尊の御開帳行事にあたる。さらに今年は、3年前に焼失した本堂再建着手が予定されており、江戸時代から受け継がれてきた伸銅業界唯一の信仰を後世につなぐ重要な年だ。境内や周辺地域には先人が寄進したさまざまな文化財が残っており、黎明期から現代までの業界史を物語る。混沌とする今を勝ち残るため、その歴史からヒントを探ってみよう。

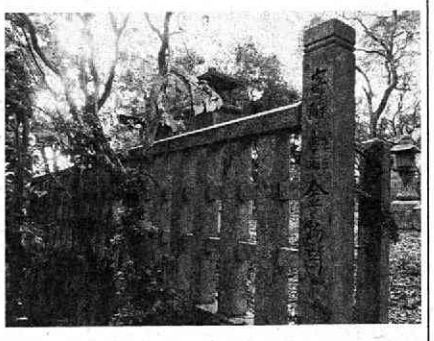


発祥から戦後の信仰

滋賀県の山奥の寺がなぜ伸銅業から崇敬されてきたのか。それは、この広徳寺で断食修行を行っていた藤左衛門という人物が、銅と亜鉛を一緒に溶かせば黄金に似た金属が得られると夢で告げられた伝説に由来する。桃山時代の文禄2（1593）年のこととされるが、日本で真鍮が火縄銃の金具などに使われ始めた時代と一致しており、史実めいた伝説である。藤左衛門はその財で本堂を再建したという。

広徳寺境内に現存する最も古い文化財は、その藤左衛門200回忌に京都の真鍮吹（黄銅精錬）業者によって弘化3（1846）年に建てられた石碑だ。幕末にかけは広徳寺外に東京の銅物問屋が道標、京都の銅商人が鳥居などを建立。そして明治28（1895）年、本堂を取り囲む玉垣が寄進され、約120の石柱に東京・京都・大阪の銅商人がその名を刻んだ。銅業界に「庚申さん」の信仰が全国に行き渡ったのは、この明治時代だった。

藤左衛門銅像。初代は戦時中に供出されたが、昭和31年の復興事業で再建された


明治28(1895)年建立の玉垣。三都（東京・京都・大阪）の銅商人が寄進数を競った

途絶の危機に深まる関係

なお、庚申信仰は密教、神道、道教、土俗信仰などが複雑に交わった信仰で、今も全国各地に庚申講が存在する。そのため広徳寺も神仏習合の色が強く、寺院でありながら、神社に本来あるはずの鳥居や玉垣が存在する珍しい信仰形態を残している。

戦時中、境内にあった藤左衛門銅像や梵鐘が供出されたが、申年に当たる昭和31（1956）年にはその再現を含めて、戦後復興行事が盛大に行われた。455件の寄進者を記した銅板石碑が今も寺務所の前に立っているが、これより12年ごとの御開帳寄進者リストが造られるようになる。境内には昭和31年、55年、平成4年、16年の碑が現存する（昭和43年は不明）。

そのほかに特筆すべき戦後の寄進は、昭和35年の伊勢湾台風復興事業だ。前年に襲った戦後最大の台風により本堂と庫裏が大破。ただちに伸銅メーカー・伸銅品問屋・原料問屋の協議によって「顕揚奉賛会」が結成され、修復工事を支援した。

広徳寺へと導く道標。上には庚申信仰を表す三猿「見ざる言わざる聞かざる」を彫り、意匠を凝らしたもの。大正3(1914)年、京都の12の伸銅業者が寄進した銘が残る

信仰回復へのスタート

広徳寺にとって2013年は前代未聞の災禍に見舞われた1年だった。4月22日夕方に本堂から出火。山上の無住寺だったこともあり、藤左衛門が建てた堂宇、本尊、仏具、装飾品が全て灰となった。9月には大型台風18号が襲来。山上までをつなぐ林道（車道）・登山道ともに崩落して、翌年1月は初護摩行事が中止となった。

翌14年5月末に林道復旧工事は完了したものの、8月の台風11号で再び崩壊し、復興はさらに遅れた。同年12月に初めて住職・総代・区長と業界関係者による協議が行われ、これを機に信徒である地元住民の間で話し合いが進み、15年7月の区総会で再建することが決定。11月に再び行われた協議では、予算の見通しを立てた上で再建案を作成し、今年秋の着工を目指す計画案が示された。

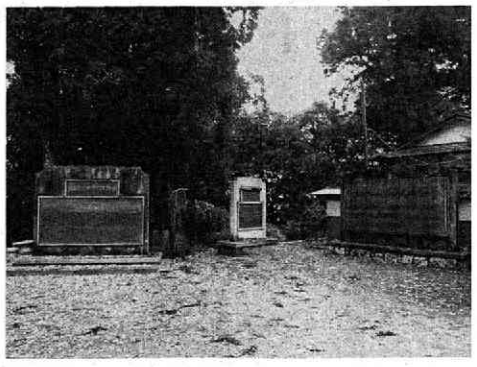
途絶の危機に立たされていた伸銅業界の信仰は、ようやく回復に向けてスタートした。

業界の「大集約時代」

申年の御開帳行事の寄進の記録は、碑に寄進者と金額が刻まれ、誰でも目にすることができる。いわばその時代の業界名簿といいだろう。

別表はその業種別の寄進件数である。業界団体ごとに並んでいない昭和30年代の見分けは困難なため、不明の欄に入れざるを得なかった企業もある。各時代で寄進を行わなかった業者もいただろうが、それでも業界変遷をおおまかに見ることはできる。

例えば昭和35年と昭和55年を比べると、メーカー寄進件数は118件から60件に半減した。伸銅品年間生産は20年間で26万トンから87万トンへ伸びたが、中小メーカーの数は減り、大手メーカーの生産規模が拡大した。戦前から続く伸銅業界にとって高度経済成長期は「大集約時代」でもあったことを知らされる。


寄進碑（左から平成4年、平成16年、昭和31年）

広徳寺寄進の業種別件数

昭和31（1956）御開帳	東京	大阪	京都	名古屋	ほか	計
メーカー（伸銅・製錬・電線）	38	41	23	5	17	124
伸銅品問屋・商社	81	52	8	28	3	172
原料問屋	31	46	22	25	12	136
その他・個人・不明	9	3	11	0	0	23
計	159	142	64	58	32	454

昭和35（1960）伊勢湾台風	東京	大阪	京都	名古屋	ほか	計
伸銅メーカー	31	42	21	6	18	118
伸銅品・原料問屋※	50	154	26	37	6	273
業界団体	3	5	2	1	1	12
計	84	201	49	44	25	403

昭和55（1980）御開帳	東京	大阪	京都	名古屋	ほか	計
伸銅メーカー	22	11	11	1	15	60
伸銅品問屋	212	86	20	34	0	352
原料問屋	47	39	38	83	43	250
その他	0	0	59	0	0	59
計	281	136	128	118	58	721

平成4（1992）御開帳	東京	大阪	京都	名古屋	ほか	計
伸銅メーカー	24	11	11	1	14	61
伸銅品問屋	221	87	19	38	0	365
原料問屋	76	80	21	58	16	251
個人	0	1	2	0	1	4
計	321	179	53	97	31	681

平成16（2004）御開帳	東京	大阪	京都	名古屋	ほか	計
伸銅メーカー	9	6	7	0	5	27
伸銅品問屋	167	65	23	34	0	289
原料問屋	11	16	9	28	0	64
計	187	87	39	62	5	380

※昭和35年は寄進者が業種別に並んでいないため流通業者を一括した。

復興の取り組み 起爆剤に

一方、同じ20年間で伸銅品・原料問屋の流通業者の寄進者数は2倍以上に増えた。東京地区の増加が著しく、消費拡大に伴い流通網が発達していたことを物語る。その後の平成4年までの12年間は、東京・大阪における原料問屋が急増しているが、当時余韻が残っていたバブル景気の影響だろうか。この年、全体の寄進総額は過去最高の2400万円に達した。

平成時代は製品・原料流通業者の寄進は頭打ちとなり、やがて減少をたどる。川上から川下へと波及していった増減サイクルは今後どのような曲線を描くのだろう。

昭和31年から今年は六十干支が一周したことになるが、その寄進者の内訳を詳しく見てみると、今も名門として活躍する会社と、廃業や吸収合併で消滅した会社が名を並べている。その碑の前に立てば、会社の命運を分けたのは何だったかと無常の念を禁じ得ない。

その寄進数454件をおおまかに調べたところ、重複する支店・営業所や個人名義の23件をのぞいた431件のうち、現在に至るまで事業継続している企業は169件（39%）。そのうち、アルミや鉄などの他素材にシフト、加工に特化、不動産業に転業した会社などをのぞくと数はさらに減り、60年前と同じ業態を保っていたのは142社（31%）だった。精査すれば数は増えるかもしれないが、生き残ったのは3分の1ということになる。この数字が、現状維持の難しさを物語っている。

業種別ではメーカー33社（27社）、伸銅品問屋・商社68社（40%）、原料問屋41社（30%）で、伸銅品問屋が最も「生存率」が高かった。なお、60年前と社名と業態が変わっていないのは86社（20%）。社名変更で多かったのは「商店」から「金属」「産業」への変更だった。

伊勢湾台風復興の寄進碑㊐。本堂火災で変色したが焼失は免れた。

根源的存在守る

直近の平成16年の寄進件数は380件と前回から半減し、寄進金額も3分の1に急減した。伸銅不況時代だったとは言え、メーカーの寄進件数が30社にも届かず、信仰の衰退が浮き彫りになった。世代交代も進み、「庚申さん」を知らない若手経営者も増えている。

業界窓口として活動している岡田保雄・京都伸銅会会長（丸江伸銅社長）は「われわれの先輩が親しみ、尊んできた歴史があり、今もそのおかげで生活させてもらっている根源的な存在」と話す。これほど業界全体を覆う信仰を持った業界は、他の産業界にも類がないだろう。

広徳寺関係者は今年の寄進について、12年に一度の御開帳行事ではなく、本堂再建復興の名義に一本化して募る方針だ。あくまで主役は広徳寺信徒の地元住民で、伸銅業界はそれを手助けする役割ということになるが、「この復興に向けた取り組みが、伸銅業を再び目覚めさせて発展するきっかけになれば」（同）という業界の願いも込められている。60年前の黎明期のような勢いと団結を取り戻せるかどうかを占う上でも、大切な行事になりそうだ。

（桐山 太志）

新年特集 黎明期 ― 混沌から勝ち残りへ ―